

広島大学学術情報リポジトリ  
Hiroshima University Institutional Repository

Title	『五輪の書』から見える日本
Author(s)	リッチー キャスパー,
Citation	日本語・日本文化研修プログラム研修レポート集, 1999 : 62 - 64
Issue Date	2000-03-31
DOI	
Self DOI	
URL	<a href="https://ir.lib.hiroshima-u.ac.jp/00038921">https://ir.lib.hiroshima-u.ac.jp/00038921</a>
Right	
Relation	



# 『五輪の書』から見える日本

リッチー・キャスパー

数年前、私は吉川英治著『武蔵』という本を読んだ。この本は武蔵の若い頃の物語だ。もちろん少し想像で書かれた部分もあると思うが、それでも著者は歴史的事実に基づいて書いている。この本を読んだ後、もう一度これを読んだ時に、序章に書かれていたある言葉に目が止まった。武蔵は彼の剣術の哲学と科学についての本『五輪の書』を書いていた。この本は、かつての日本の武士の記録であり、またすべての状況においてどうやって葛藤に打ち勝つかについて書かれている。だからこそ『五輪の書』は弟子たちに剣術を教えただけではなく、今でもたくさんの企業の重役たちや世界中の軍の戦略家たちによって幅広く読まれている。このレポートの基本として、『五輪の書』とはどのような本か、外国人の視点、つまりアメリカ人の視点から『五輪の書』はどう読めるかを書こうと思う。これによって、数百年経った今でも人々が考えていることとほとんど変わらないことを理解してもらえればと思う。

地の巻は武蔵の科学的思考と一般的な格闘技の基本に関する武蔵の分析が書かれている。「武士が兵法の道を行なうということは、何ごとにおいても、人にすぐれるということを基本とする」。私はそれがとても価値のある目標だと思う。これは誰もがみな求めているものでもある。そして、たくさんの日本人が心に留めてきた。例えば、日本は世界で屈指のハイテクノロジーの先進プロバイダーだ。日本が他の国と比べてどれほど小さな国かということを見ると、驚くものがある。しかし日本人の中には、他の人より優れようとするにとらわれすぎている人もいる。そしてその中で、優れることの本当の意味を見失っている。誰のこととは言わないが、日本人はすでにある技術をさらに向上させたり、適応させることにかけては優れている。しかし、独自のアイデアや考えが世に認められるようになるにはまだまだ長い道のりがある。

武蔵はこのような人生は「この兵法の道に、色をかざり、花を咲かせる、すなわち表面をかざり、華やかにして、技術をひけらかし、何何流の一の道場、二の道場などといって、その技を教え、あるいは習(う)」ようなものだと考える。この「私はお前より優れている」という考えは「利益を得ようすると、結果は俗にいう『生兵法は大げかのもと』」という悪影響を及ぼす。世界中の全ての人が、これを気に留めておくべきだと思う。

二つ目の輪は水の巻だ。水とは武蔵の生き方を表しているように思える。「水は四角な器でも丸い器でも、それにしたがって形を変え(る)」。一番最初に思い浮かぶのは日本の社会だ。日本の社会は根本的に真似っこ社会だ。全ての人が集団の一人だ。これは社会や企業の中で他の人間に守られているような気持ちにさせる。なぜなら皆、大家族の一員だからだ。だが、それと同時にこの感覚は個性の損失を生み出す。誰もが見下されるのを恐れたり、みんなと違うことをやるのが怖くて、自分の意見を言いたがらなくなる。こうなれば、人は皆ロボットになってしまう。もちろん最近は少し変わってきたが、その変化は実にゆっくりだ。この個性の損失は想像性や個人の強さを損なうことにもなる。アメリカ人として、集団の中であまり話さない人間ではなく、少し違った人間になるように私は育てられた。もし何か必要なものや不便なことがあれば、声に出して意見を言う。たまには何度も声に出さなければならぬこともあるが、これによって、欲しいものや必要なものを手に入れることができる。数年日本に住んでみて、武蔵が水の巻で言っていたことの本当の意味が分かった。私はできるだけ日本の生活や社会に慣れようとしたが、まだ本来の自分も残っている。同じだという時もあれば違うという時もある。武蔵はその時や場所に合わせて最良のことをすべきだと言っている。

火の巻は三つ目の輪だ。武蔵はこの巻で戦闘について述べている。「戦いのことを火に思いなぞらえて、」火はよく自然の中で破壊力だと思われている。戦闘について考えると、現代の日本との関連性は分からなくなる。日本は軍隊のない平和な国だ。だから普通の組織の中で戦闘などありえない。しかし、企業やスポーツでの競争や闘い、ましてや高校生の大学受験戦争は、かつての封建社会の日本の戦いのようなものであり、今日でも多く見られる。これは私が日本人に対して一番すごいと思う特色の一つだ。彼らは皆献身的で勤勉だ。これらの属性は、逆境に打ち勝ち、「戦い」に「勝つ」ために多いに役立つ。

風の巻は四つ目の輪だ。武蔵はこの巻で、他の道場の哲学や科学について書いている。「他をよく知らなければ、自己を知ることはできない。」日本人は他の国への旅行やツアーで、世界中へ行くことで知られているが、これは他の国への理解を深める方法の一つだ。しかし明らかにコミュニケーションの問題のせいで、ほとんどの場合、文化に対する理解は浅いものである。日本での人々のお互いに対する理解についてはどうだろうか。まあ日本に行ったことのある人、あるいは住んだことのある人ならほとんどの人は「建て前」と「本音」を知っている。日本人は「建て前」を使うので、自分の本当の気持ちを伝えることができない。どの社会にもそういう場はあると理解できるが、日本ほど必要とされるところはない。さらに日本社会において相互の働きかけは非常に未熟であり、不慣れである。日本人は幼稚で礼儀がなっていないと言っているわけではない。それ以前に、彼らはお互いのコミュニケーションが得意ではないのだ。それは多くの誤解を呼ぶ。だが幾つかのこと

においては、私も理解できる。日本は西洋東亜、両者のさまざまな国から、今までたくさんの影響を受けてきた。そして未だに日本に合っていないものを取り入れようとしている。しかし同時に、そこには日本の社会の遅れをさらに悪化させている何かがある。日本の子供たちは小学校のころから、学校帰りに数時間の塾通いを始める。これによって子供たちは社会的になれる機会や友人と遊ぶ時間が徹底的に減る。そしてこれは高校卒業まで続く。彼らが大学に入ってから、また会社が強制する時も、多くの人にとって、その殻を破ることは大変難しい。しかし、これは一見武蔵の時代においても問題だったのではないかと思う。そうでなかったとすれば、なぜ武蔵はこれについて書いたのだろう。日本人は他人を理解することを本当に学ばなければならない。そうすれば、他のものは自然に後からついてくるだろう。

最後の輪は空の巻だ。この巻は五つの中で一番短い、一番分かりにくい。私は武蔵が言った「空」の意味は何だろうと、長い時間を懸けて考え、ついに理解した。「空の心には善があつて悪はない。智慧があり、道理があり、道があつて、はじめて心は空である。」武士として、このように考えることで、自分の心を清くすることができる。この巻は、霊的で宗教的な意味も含んでいる。このような考え方は世の中の人皆にとって、分かりにくいと思う。だが、ここでは日本人を中心に論じているので、日本人について考えてみる。数百年前の武蔵の時代に、日本人はものすごく信仰心の厚い民族だった。だが、今日の日本では一般の人は宗教に熱心ではなく、無関心な人が多い。多くの日本人は宗教が仏教か神道、あるいはその両方を信仰しているといわれている。しかし、これらの人々がこの宗教活動をするのは、年に二、三回ぐらいしかない。武蔵が、熱心に心の空を探さなければならないと言ったとき、それはおそらくそういう信仰の意味ではなかったのだろう。武蔵は日々の練習や自分の描く絵を通して、これを見つけようとしたのだろう。難しく聞こえるかもしれないが、誰もが見つけやすいわけではなく、ただ為になるのである。

武蔵は、自分が生まれる前の人々や、まだこの世に生まれていない人々の心が分かっていた。この武蔵が力を注いでいた兵法の道は今でも日本人の心に残っている。しかし、ほとんどの日本人はそれに気付いていない。同じ道を歩んでいながら、なぜなのかは分からない。このレポートの中の意見は全部、私の武蔵の哲学に対する意見だ。私の考えていることは、学術的に、歴史的に見て、正しくないかもしれないが、日本に住んでいるアメリカ人としてそう思える。私は日本の習俗や文化が大好きだ。ただ、私の言ったことは、一度はどこかで言わなければならないことだと思っていた。このレポートに価値があるか、価値がないかを判断する前に、宮本武蔵の『五輪の書』が人によって違うインスピレーションを得ることを、忘れないでほしい。